土屋正義編輯

# 繪本石山軍記

第二編

十

竹
遠へ
2269
20

繪本石山軍記第二編卷之十目録

○忠興藤忠同胞片岡攻ゟ初陣高名
并ニ飯田基次義心を顕す
○好久密使と諾ひて松永を欺謀く
并ニ基次松永の恩を森に語る

内へ遠 14
2269
20

○松永滅亡して和州平定す

并に順慶麾下の将卒を感賞す

# 繪本石山軍記第二編卷之十

土屋正義編輯

○忠興藤忠同胞片岡攻ふ初陣高名并びに飯田基次義心を顕す

天正五年丑九月二十七日松永父子討手の大将として城介信忠進發有ければ相從ふ軍將の人々は長岡兵部大輔藤孝同じく長子与市郎忠興次男頓五郎藤忠佐久間右衛門尉信盛惟任日向守光秀先陣にい土地案内知る筒井陽舜房順慶に指揮せらる筒井城の留主代に残るは慈明寺左門福須美兵衛嶋左近森志磨守等と止め置順慶は養子藤四郎定次（順慶の叔父慈明寺左門順國の子〻幼名藤松丸と云順慶子なき故に元亀三年養ひ取て子とせり）今年十六歳なるを名連老等

いい箸尾宮内少輔高春猶原右衛門光之小田切宮内少輔春次小泉四郎左衛門秀元井土十郎大夫國秋松倉右近勝重等五千余人引卒し総勢四萬三千餘人の大兵を十月朔日大和國平群郡法隆寺ぬぞ着陣ある茲に葛下郡片岡の城ゐい松永の麾下海老名兵衛友清同く助九郎友久森兵助正友同じく藤五郎正次等人數一千餘人にて篭城も先読敵と手始めに討崩せして十月二日の未明より押寄噪き叫んで攻詰にる此時長岡の長男与一郎十五歳舎弟頓五郎十四歳にて兄弟今日初陣の戰場に高名して父に讃られんと真先懸て馬を進めを城門口近く駈寄るを城中に准備の弓鳥銃擧下りに間ふく飛せて面をなぐく様もな

く長岡の家臣們期と着ろり若殿過失ぬりてい言解ち〳〵續いて乗入やと呼立て我先にと城門口に進み寄楯を揃へ矢玉を浚ぎ長岡の家臣林傳右衛門とる者樺で造り〳〵大槌振上力に任せて城門の張板微塵に摧けと打立れば貫諸共に外れ飛て城門側左右へ開きころり夫乗入やと忠興藤忠士卒諸俱噇と込入て周章慌忙敵兵の中と會釋用捨も入ごそ敵城一番乗と呼ちく〳〵茅萱刈如く斬て廻れば其勢燃立烈火に髪髴う筒井惟任の軍隊斯と着ろり長岡勢敵城ゐ蹈入ろで豈安閑と傍觀べんや續けや者共進ろくと兩將真先に馬を乗出し嚴しく指揮して進み入ば總軍螺を吹立金鼓を鳴し被き連て大軍攻入るに

森傳助の反間
松永久秀の密
書と松倉右
近の陣所へ
持来る圖

森傳助

勿論小城の廓裡なれば込入敵兵充満に隨ふて城兵矢石の種もつき果防ぎ留る場所も塞がれしゞ多く居あゞ討るゝもの夥しく名誉なき匹夫に害れんより心静らに自害せゞやと大將海老名森と始らと一郎等五十餘人本丸に駈入枕を並べて屠腹をしけり残兵どもハ思ひくに陣死し昔日の晩刻遂に落城を信忠亨始めよしと悦び給ひ將卒の勲功を賞ぜん將士戰勞を厚く慰ら る最も長岡兄弟初陣の働き城中一番乗の心懸拔群く宜く父君に奏して褒賞せんと信忠より御太刀一腰宛兄弟の人へ下し賜ふとりや偖信忠ハ此片岡城ゟて兩日諸軍勢と休息せしゝ同く五日信貴本城へ押寄給ふ先陣ハ筒井順慶法印〻當國案内ハ



云も勿論之平生に松永とい不和の間ゆへ今般逆謀の籏を立しゝ べ順慶一番に信長へ注進御征伐の節先鋒仕らんと豫て望みを きらる願ひも有ハ筒井家下々の雑卒までも松永の姦賊列侯に加るハ渠奴實に不思議の幸甚之三好義長を毒殺し將軍を弑し奉り五逆の大罪天刑を脱遁れ信長之を用ひ給ふまゝ片腹痛き処爲思ひ〻るに今般我〻自滅を招き叛逆世上に表顕ることそ先ハ怨靈の道ゆく處〻渠を滅さハ則ち憤死の人人へ取も直さず追善供養筒井の家の義戰へとて上下一致に勇ミけれハ順慶真先に進んで攻上り〻る惟任佐久間長岡の三將筒井に續きて攻登るに山坂嶮く滑途がちゝて面々路の難處に躊躇濘り轉ゞと脚下用心し山路

五十丁を攀りて漸やく城際近く押寄つ三隊齊しく関を作りて樽狭間と臨んて火矢と射懸鳥銃と飛を綜繁しと虫る松永方故意静り反つて相敵にあらざ着て有られば順慶苛つて城門口に攻着んとす家臣猶原右衛門光之主人順慶を止めて曰く敵手出しあく静り居綜寄手を城際へ十分引着大木大石を轉し蹈して壓害らんの計略有べし軍に馴る老功の松永納り反るい一物候らん先能敵の動揺者給へと云順慶實のと思ひられば先手の士卒を城際へ寄ず唯鳥銃飛火を打放ち敵の形勢を探りければ老智の松永逸くも察して敵兵漂ひ居ると討入機應之一戦懸て追捲れとて入江大五郎古市左近へ逞兵七百余人を相従い

せ一捲りせば長追とあさす直ちに城中へ引把べしと禀し度せば兩個領承し城門颯と押開きて漂ふ筒井勢の中真一字に突入て斬立る筒井勢ハ待設らる綜られば引包んで討取んと競ひる松永勢ハ四方八面に度りて雜立突伏血戦あせば筒井勢大兵あぐも突崩され右往左往に散亂して思ひぞ後方へ三丁許り將碁倒れ成て引退ぐく固より嶮しき山路ハ人馬と並ぶる廣途あらねば惟任長岡の兩軍勢も入替るぐきの足溜もなく筒井の後に續きるゆく俱に人雪頽して伏轉び不覚の敗走索ろりる入江古市ハ長追もせず後附せずと味方と繻め逸くも城へと引入ふり是れ松永ハ味方の損亡を恐れ敵の脚場の悪き

と計つて門擲せしそ日を送らせ脱氣に逮ふ處を考へ計畧巡
り勝利と得んと始終の利軍を測れるものゝ偖て茲に久秀の家臣
なも非て身命を松永ゞ為に抛つる飯田甚次郎基次と云者あり今
般反逆簇立の篭城に就て一の城戸の堅固を委任せられ勇兵二百
余人を従へて防禦に透間ならざりける松永も基次を託ゝ
に思ひけゝ

此飯田甚次郎基次と云へ和州添上郡南都なる北小路の城主
飯田出羽守頼直ゞ舎弟にして太郎左衛門直基ゞ次男ゝ舎兄
頼直と同じ城に住へ俸禄二千石を領しけり最も筒井家随
一の麾下にして軍功の程も數度有るゞ基次生質好酒の癖

あり舎兄出羽守頼直い勿論ゝ嶋左近森志摩守松倉
右近の衆人基次へ諫言を加ふ繰數回へ基次ゞ時へ須臾禁酒
まれども更に十日と保ぞ乳醉なき頼直生質廉直の人なれ
ば諫めを破るへ匹夫の根性酒癖に泥んで躬と忘る者生渥寒
苦の底に沈うて先祖の家名を潰さに到る不処存の舎弟
い有て益なゝとて遂に天正三年三月二十五日怒つて同胞扎
義絶とゝへ北小路の城を追放なゝ基次先非を悔ゝ禁酒と
守り圓頂黒衣に客變んとも此繰松永ゞ方へ漏聽へれば久
秀へ基次と深き好意あり故に基次の武勇を愛惜へ呼寄て
遁世と止め勵みへ信貴の山麓に閑居せへ五千俵と與へて

扶助ゐ〜る然るに今年九月十六日兄出羽守頼直六十歳
にて北小路の城に於て卒去を其喪中に頼直が嫡男三郎治
郎直宗次男新八郎能直等相議して順慶へ伺ひ入叔父基次
を北小路へ再び迎へ入れと為せし處に生憎も松永に此逆乱起
りて基次は松永父子の恩義ゐ縛られ甥子兩個の勧めに悖りて
非企を知つて松永に屬従し義心を立るこそ武士と謂つべし
然程に信貴山の敵城は殊に要害堅固の切所の山城にて城將は軍
畧長せし松永久秀其外精兵の手練許多籠れば〜もに猛き寄
手の方も嶽路難山の滑途に攻飽倦耽圍むに而已看て在られだ筒井
順慶無念とや思ひん麾下松倉箸尾小田切小泉井土等と召寄

て曰く吾望人で松永討手の先陣と徒らに日數を打過る縡信
長公へ對して不忠と云且は勇謀の怯きと省らるべし工夫を以て當
城攻落さべき各良策有ば稟さるべしと有時に松倉右近勝重稟
しけるは某し豫て恁る時節の用に立んと去る年より反間の謀
略と云含め森傳介好久に密諜し松永が方へ仕へさせ置れば好
久今般反間行ひ候ふべく介旨注意達さべしとて直ちに松倉矢
狀を以て森傳介の方へ通じける此森傳介好久と云る者は筒井家
三老臣の介一個森志摩守好之の從弟にして順慶に仕へて五百石と
領し軍功些くざる士なりしが去る永祿十二年の頃松永と筒井
並松に於て兩家雄雄の戰爭ゐせしが順慶終に敗北ゐ及びある

介後三老臣俱に謀りて森好久に能禀〜含め故意と順慶の勘氣を蒙り俄浪士逼迫の体に省せて信貴毘沙門天の寺僧と頼みて松永久秀に仕へて近侍し本地五百石を宛行ふ〜是則ち孫子用間の篇に云く五間の中の反間ゆり姦雄邪智の松永ゆゑ共好久の底意深くも察せず心置ふく召遣ひに鳧

○好久密使と諾ひて松永を欺謀く并び基次松永の恩を森ふ語ふ

偖森傳介好久い松倉よりの矢狀を得てより心に點頭何哉宜手段有るべしと密に介虚を伺ひ居るゞ松永父子ハ今般の篭城手勢の外援兵ゆゑれで織田の大軍ハ取囲まれてハ始終の處ハ勝利覚束ふく要害に篭る共士卒を損ずべし然ば石山本願寺え加勢を乞んとて岩成春之入江政重に談合られば兩個此議然るべしと云去ふゞ斯の如く寄手の兵稲麻竹圍と取詰われば石山へ使者せん者難くも有ふ入江政重の禀しるい先陣筒井家に由縁あらば敵中ゆりも無難に通らん彼飯田甚次郎こそ然るべし基次に命じ給へと勧められば岩成春之の禀しるい森傳介も筒井に由縁あり渠生質能辯利弋ゆれば必ず首尾よく綜仕課すべと云勧め兩議に論じられば久秀是と考へて云く基次ハ勇有く謀畧足ぜ敵と防ぐにハ一騎當千の俊士ゑ好久い亦智辯を以て人を伏き石山への使者ハ好久こそ宜らんと傳介を呼て口演と云含め暗く筒井の陣に赴き汝じが辯弋以て甘味欺謀攝州石山へ到るべし

〻命ぜらるゝ好久は渉りに船の心地ゐして畏まりて使命を領承も
松永は本願寺への書翰を認め森傳介へ手遣らる是松永が命運
窮まる所なるべし松永石山へ贈る書通の文に云く
前に貴札を得甘心限りなく候ふ野生身不肖なりと雖も戰國
の中に縱横し頗る英傑の振舞を知る大丈夫永く他人の
下位に居すべからず忽ち大志を発し信長を以て合戰ふ及び
候ひ畢ぬ而て蚤も無勢を以て大勢を破綽あさるず冀くは本
願寺御加勢を以て信長の後を襲ひ相狹んで之を討ん併き
て國敵佛敵を平げん耳
天正五年十月八日
松永彈正少弼久秀

本願寺軍師　鈴木源左衛門尉殿

徒て森好久は這書翰を携へ八日の夜暗に城中を出て松倉右近勝
重が陣所に到り松永が書翰を渡し物怪の幸甚得うし轉末如
此々々の由告聽へられば勝重殊に攸悦して順慶の本陣に好久同伴
し且介謀畧を伸にられば順慶悅喜限りなくして先好久に酒盃
を與へ當坐の賞として金子三十兩賜ひる偖松倉は好久と略ふ
して箸尾宮内少輔猶原右衛門佐と先とし諸事に馴うふ精兵
二百余人石山への加勢の体に打扮せ九日の夜に攝州平野郷
に故意遠く遣はし置つ森好久は石山本願寺へ行万事通達約定
しる体に信貴の山城へ馳帰りて松永父子の前に出で某し石山

の城内ゟ到り御門主に直々拜顔仕り御頼ミの一條稟〻入候こゝ御門主快〻く許諾わ〻せられ軍師重幸に御商議〻給ひ先加勢の証據として勇兵二百余人使者に續きて差送るゞ〻猶門下の衆兵追追出〻寄手の後卷〻て討拂ひ綽茲五日を過ぐ〻ぐるの間城を堅固ゟ守らるゞ〻と重幸殿の命せに候ゟとて實と〻ゟに欺きられを〻さ〻も謀將の松永父子も綽に乘ぜ〻偽策と曉ぜ大きに歡び且感稱〻て厚く好久の働らきと勞ひ〻り聽て偽兵の二百余人ハ山距の間道傳ひに城の搦手隍際〻て進み来る夫と看るゞ〻城内ゟハ索と投遣梯を打渡〻人數残らぜ城内へ引入早速の出勢悦着〻とて酒肴手と盡〻て饗應〻役所役所の堅固と教へる猶も松永ハ森傳助に指揮〻汝石山勢の隊長と成て諸事進退〻て防禦ぜゞ〻て無二の腹心とぞ任せるハ嗚呼時運の竭るぞ思られゞ〻ゟ偖も筒井順慶ハ信忠の本營に到り明日は則ち信貴の敵城攻落ぜ〻き心組に候ゟと言上〻て仔細と話說〻れば信忠聽て大きに勇まれ諸將へ密に企心と得させ好久の合鞆と候居給ひ〻り恁て翌る十日の未明より筒井勢五千餘人関と作り勇兵真一文字に競ゟて攻上る城中にハ好久の反間を知らず面々特ロ々と相固ゟて弓鳥銃と射出〻擊出〻寄手引色立を看濟〻つゝ飯田岩成入江の輩城門を開きて突て出れば筒井勢ハ散々に駈立られ思ひぞ二丁許り引退ぞ〻く小田切小泉們ハ踏留まりて暫く支へ戦ふ中ゟも城中の容

信貴山の搦手より
石山本願寺の偽兵
入城ちん圖

子如何と候うるる箸尾猶原の偽兵二百余人い城内の十方に分れて火と放ち開さ一時に擧ゝうゝぶ松永勢い大きに周章慌忙是い反心の癖者ありと詈合火口火口と消防きんと為れども火氣山風を呼て搦ちられば瞬く間に城中一圓に猛火廣ぐり櫓々に火烟ゝりゝゝぞ寄手の筒井勢恁と看るより驚破や乘入ごきの時刻ゝるぞ餘さぞ漏さぞ討て把と噇と押轉して城戸打碎き支ゆる敵兵突立斬伏僉我一に辺入つ手當る任せに薙捲りられば松永勢進退途とうきちゝて城門口にて討るゝ者數百人死體い累々として小立さゝぬせ火勢倍々強大に廣がれば煙うづ捲立て尺寸も看分ぞ寄手ハ二陣三陣續きて攻寄辺出る敵兵討立れば恰ゞ囊中の鼠と狩取ゞ如ゝ城兵今い百計盡果辺も協ゞ是ぞゝりと或ひい自殺ゝ陣死ぬも有又い竊びて落行もあり此時飯田甚次郎基次は入江岩成の兩個に云やう恩人松永父子滅亡も既ゝ今日中に迫りて候ふ某ゝ大手を防ぎ潔く陣死せん兩士い久秀父子の介錯ありて殿主に火と放つて自盡ゝ給てと懇ろに暇乞と述て余波と惜ミ已ゞ役所へ立歸りつゝ郎等石井大藏正春北市戈助次全等を始め五十餘人列居つゝ最期の盃きを巡らしける斯く有る處に森傳介馳來つて云く今般松永父子の落城い吾豫て反間と懷き策と施こゝて故あり固ゝり和殿い松永の麾下に非ぞ正くも筒井家の一將ゝて且主家に於てい族氏ゝ俺等も連る廻縁の一族ゝり

卒某〳〵と倶に筒井家に歸り給へ最も北小路の甥達兩個も平生和殿の縡と俺に譚りぬ信長公松永屬と怒り給ひ俺反り忠の功に一命に懸て禀〳〵宥むべく思ふそれば管ぞしも生害せゝる縡勿れと涙と流して勸められば基次も感涙催ふして謝して曰く足下の芳情死も共忘れぞ然ふぐ〳〵亦義の向ふ處一ツ有去々年の春俺沈酒の悪癖に依家兄出羽守賴直が勘當と蒙り既に浮浪の躬に陷いる處と松永父子平生の別懇と顧られ當信貴山の杜下に安居せしも食料數千俵と饋りて扶助と受今も亦松永落城の際に及び恩義に背き一命と惜こ奚ぞ看棄て帰らゞまや且足下の心に反間有縡俺知ざるに非ずと雖も舍兄に勘當受ふぐ〳〵も筒井



殿に主家に主家大事と只走〳〵も不忠に當り心〳〵ぞも見過し〳〵〳〵足下も主恩に仕ゆれ同ど支一合ゆも其禄と食則ん亦難と避べ〳〵ぞと云文も有彼晉の豫讓〳〵心と看做ひ俺亦兄賴直當秋病死ぞり基次陣死して泉下に趣き賴直が勘氣と侘んと思ふに戰陣に勇ふきに孝に非ずの咎と免グるべしと答〳〵好久理に伏して一言の返答も出ぞ赤面して感愧に忍ぞ互に今世の暇乞ふして好久に竊に筒井の陣に帰り〳〵

○松永滅亡して和州平定を并に順慶麾下の將卒と感賞を著尾宮内少輔高春猶原右衛門佐光之に敵城諸所の役所に火を懸且城の四門と開きて味方と招ん筒井勢一同に関と作り

大水の拒む如く駈入らば大將信忠にも簾本と動して長岡惟任に
續きて攻入給ふ介勢山嶽も拔ごく大軍なれば松永が八千の軍
兵們も落花微塵に討崩されて敗兵生路を索めて遁る者是
亦牧へ舉るに遑なく時に入江大五郎岩成小治郎大將久秀の前
に來り味方の總勢堅守を破れ今は城中に敵軍迄入如何共禦防
の術計なく潔く御生害有間欲く俺們も御供仕らんとて
飯田基次の義心を告られば久秀大きに感激なして譜代恩顧の郎
等にても傾覆の主君と視る則は多く看放ちて後榮を計る是
おのれ通俗の人情に基次の如きは俺為の腹心なり此上は快く屠
腹遂んと而已汝等は殿守に火を懸俺首級亡体を灰土とせと莞



再として殿守に登り嫡子右衛門佐久通と近着俺信長を怨む
る緯深きに豫て汝も能知りなれば今くざく敷云に逮ず此信貴に
篭りて逆旗を翻さば信長必らず自ら進發すべく倘然らば信長を
矢玉に懸て鬱憤散ぜんと思ひ切に渠れ俺惡む所を知や小童上
りの信忠を差向う亦寂々寄手の旗指物を視るに柴田丹波の肱
股い看つぐ不意を恐れて從事せむるは是等の遠謀行ふ者は羽
柴秀吉が智術と思へば遮莫人心の貫く時は曾我兄弟父の怨
と報ずる如く討得難き緯有べからず汝如何ともして該城中を脱走
時節を窺ひ信長に双尺父が積恨を晴し得させよ迚も乱軍の中
に死しも共誰ぞ肖實知る人や有ん早々落よと急しられば久

通俄に服色と變じ教興寺の方へ脱走空井戸あれば密に飛入て
跡を暗し何處ともなく落失にけり（久通中国に忍下りて長門国に隠れ住る信長を覘ひ討べき時節を得ず望みを遂ず早る其孫に永種と云者あり永種の子を松永貞徳と号し世に名高き誹諧の鼻祖なり）去程に松永彈正久秀が嫡子久道
を遁れ出て今い心安しと思ひられば豫て年來秘藏なる平蜘蛛
と号し名器の釜と信長の手に奪はれん縡死後の残念此上な
き彼平蜘蛛の釜を殿守に把寄俺手に打摧ぐ遺念なしと殿守
より下へ礑と投落し微塵と成て火中に失ると久秀打瞻ゑて快哉
高笑ひし襟の上に安臥を組て太刀引抜て肚に刺立右手の腦へ引
廻して小治郎介錯せよと呼立しが春之透さず走り寄て久秀が
首を討落し直ちに首諸ともに躰を火を懸死出の御供凛すべし

とて其躰も刀を咽笛に刺立猛火の中にぞ飛入ぬ時に久秀行
歳六十八歳岩成小治郎春之三十五歳入江太五郎政重五十一歳松
永大次郎永種二十五歳何れも我後れじと自殺なす他恩顧の郎
等座列して殿守の裡に暑服忽ち大厦高樓燃上り憐なべし
咸陽三月の紅と成る縡と恁く飯田甚次郎基次い久秀主從自
殺の為体を看て去々俺も最期の一戰を遂て恩人の後に逐着むや
と主從五十余人筒井の隊に蒐入基次松永の吊の一戰死武者の本
事受給て呼いり暴に暴れて討入り小田切春次松倉勝重馬を
列べて馳寄つ足下の義心い然縡逆徒に與して死を望るい亡
兄頼直の本意ふ恢ふまじ狂て味方へ歸參れと兩人詞等しく呼

正月元旦
安土城の大
廣間ゐおゐて
茶湯の圖
信志郷
秀吉
タ菴
丹羽
林サヂ守
フヂ孝

利休
タキ川
コラ木
市ハシ
ハセ川

ゆうしゅうど耳にも入ぞ打てうれば筒井勢い一個も敵せず道と開きて
通りければ基次是非ふく城戸蒐出て長岡藤孝の陣に討入敵兵五
十余人を討倒し味方も二十余人討滅さる此を切素まして惟任の
陣に懸り鐵花を散して斬結べば敵兵十余人を討のろもも其躬後
數ケ所の疵と負て遂に行年四十三歳にして戰死す惟任の一族明智
弥平治光春基次が首級を討得さうろる基次が勇臣石井大藏正春十
九歳北市戈助次全十八歳是等を始め二十余人の者們惟任の陣に
て戰死ふりり松倉小田切等順慶の命を奉惟任光秀に相斷り
基次主從の死體を乞取彼北小路の城主ころる基次が甥直宗能直
〳〵順慶の情を述て渡されしうべ甥の同胞深く歡び且義節の戰死



を悲悍して直様南都の稱名寺と云淨刹へ主從の亡體を舁特行
厚く埋葬して吊とふす却て松永が不祭の鬼と成後吊者も無りける
なり人の實と失いざる者い天然自然の哀愍受て葬らと得て佛縁に
遭皆是在世の善悪に依と観べしさしも河大に名を轟うせ
し松永の信貴城も一日に落没し織田家の軍勢乱入し分捕高名と
りぐ〳〵りり偖筒井の手に討取首負將卒都合七百余級之味方と手
負死人五百余人に及ぶ城中上下三千餘人戰死寄手も手負死人
四千余人と之同じく土日順慶諸士に命じて敵將久秀の首級と需
やしむるに岩成小治郎火中に投じて焼失せし故遂に省べず是に
於て尓残りし武具及び半焼半存の死體們を尋ね出し片岡山

の達摩寺に葬り後懇に吊祭せしめる程ゐ人皆情ある計ひと感しる松永一族既に滅亡せしゑべ大将城介信忠諸軍を卒し同じく十二日京都まで凱陣有て二條の城ゐ入給ひつゝ飛札を以て合戰の次第を詳に安土へ注進し給へべ信長悦喜斜めゐず堀久太郎秀政松永友閑法印を御使として天朝へ奏聞ゐし給ふ様い老功の松永逆亂起さんと為と弱冠の信忠諸勢を采配して日と経ぞ征伐遂候ふ緯稀代の勲功天朝への忠戰宜しく勸賞行つるべしと上奏を依之信忠從三位に進み左近衛中將ゐ轉任ゐり亦順慶父子ハ強敵の松永を先鋒と望みて討亡せし緯軍忠賞感最も浅からず自今大和國を全く領し一國の大守ゐるべきとの感状亦



信長公より別段褒賞として來國光の太刀不動國行の短刀并びに駿馬金子小袖等數品賞賜下されにゝり同じく四郎四郎定次を始め麾下の武士云ゞ勿論長岡惟任佐久間の衆人信忠卿の旗下從士まで夫々恩賞を下されゝり同じく十六日各疾御暇を賜り京地を退去も信忠卿ハ十七日早天二條の城を發足し給ひて江州安土に着城あり亦筒井順慶法印を始め麾下の諸將和州に歸陣して集會し怨敵ゐる隣境の松永を滅亡し年來の鬱憤を晴せし而已ゐらず松永の關所地皆悉く筒井家の領地に賜ゐりしゐば屢賀祝勇ゐりけり順慶ハ興福寺の成身院に陣し子息藤四郎定次を大將として小田切宮内少輔春次小泉四郎左衛門秀元蒼

右近勝重等三千餘騎の逞兵を率ゐ奈良の多門山を攻むるに番兵一晝夜ゝ堅固に防ぎたれども信貴の根城落去の上ゝ頭ら摧る蛇の如く目的なく連も篭城悩ひ難ゝそ十九日に城明渡ゝて各退散き是に於て順慶城番とゝ山岡美作守景隆に守らきむ信長公の命に依て同年十二月五日城を滑して山を順慶に賜ふ順慶其地を飯田直宗に與ふ其近辺を農田とゝ俗に飯田ひゝきゝ号して今に在と云傳ふ同じく十一月三日順慶筒井に帰城ゝ箸尾猶原小田切小泉井土松倉ゝ他信貴山多門山に於て勇功軍忠を顕ゝ諸士等感狀ゝ他太刀馬金銀衣服等を与へて之を賞き殊に森傳介好久ゝ反間を感じて名を森草人佐と更ゝさせ旧禄五百に千五百を加増ゝ二千石の家老格に執立侍大將を兼役せゝる外に太刀薙刀駿馬金子小袖を賜ふ

茲に岡周防守國高古市左近景治高山主殿頭廣賴菅田備前守豊春等ゝ松永方に与力せゝ信長公ゝ罪科を恕ゝ給ふ順慶に命せて所領没収せゝれ浪々の躬と零落て同國吉野郡の山中に身退き織田の猛威を恐縮ゝて憂星霜を過ゝるとゝ去程に織田右大將信長公ゝ諸國の強敵向ふに亡ざるなく征ゝるに立地膝下に降伏き尓勢古今未曾有の武將なり然れ共唯石山本願寺のゝ更に信長の鋒鋒に伏せゝ却て攻寄る尓度毎に織田方敗軍ゝて死傷多く奈何もゝて石山を攻拔んと種々思慮を廻ゝ給ふに藝州の毛利家ゝすゝて石山へ兵粮贈るとゝ奇怪之且足利義昭備後の鞆に在城ゝ中國悉く武命に傾き帰洛の謀急之と聴逮べ先

中國を征して後石山を取圍ミ兵粮を減じて攻詰んと思慮とりぐゝふ
榮し給ふ折ゝ羽柴筑前守秀吉ハ此程石山押への爲にと天王寺の
附城を預り護り時々斥候と出し門徒們の油斷を省濟しハ却か
し信貴攻の一左右待れし處松永滅亡して紀州平均し諸將僉々凱
陣に逮びしかば秀吉も附城護衛を交代し安土の本城に參向して勝
軍の祝詞を述られしかば信長公御機嫌麗ゝく先當今の処差當
つる急なる敵も省へざれば秀吉ハ嚮に稟し渡せし如く早々播州
表へ下向なして國中を切鎮め西戎を傾け予ゞ西征發向の魁なる
べく命ぜる秀吉謹んで拜承し急ぎ出陣の准備とふし天正五年丁
巳十月二十三日江州小谷の居城を啓行し播州の地を志して向はゝ



り（自是秀吉の武功を以て先播州一圍に切ゑぐ備前宇喜多を亟伏せしかつぎに尼子と翼けて山陰山陽に切入事實有ども本傳石山に抱くゆゑ總て省畧す）斯て
後羽柴筑前守秀吉ハ播州平均に切鎮め歸順の者ハ人質を取
固め國中の仕置全く行届きしかば此由審らに安土へ注進を信長殊
の外感賞ありて五十日許りに播州一國を静謐せし緯大功成就の吉
兆と謂下但し一旦安土へ罷り登るべしと弥播州を賜ふべきの御朱
印を做下さるべき由飛札を以て仰せ遣はされしにより天正五年丁巳
十二月二十三日秀吉播州姫路を出て安土へ參殿し播州合戰の次
第言上ふせ信長別して感悅あゝせられ當座の褒賞遣はさんとて不
動國行の刀並びふ介銘と乙御前と云る葉茶壺を賜はりれば秀
吉大きに面目を施し辱ふき段御禮を稟し上皆年ハ安土に伺候

せられるが待とゝ申されし早年暮て天正六年の青陽を迎へ正月元旦安土に於て御茶湯あり客ハ三位中將信忠卿羽柴筑前守秀吉武井二位法印夕庵長岡兵部大輔藤孝林佐渡守秀成丹羽五郎左衛門尉長秀滝川左近將監一益荒木摂津守村重市橋九郎左衛門尉長利長谷川丹波守長谷川宗仁等〻實も愛度新春〻とて各〻歓喜せぬるハ勿りしとぞ同ぶく十五日和州筒井順慶の老臣小泉四郎左衛門尉秀元と名代として安土に到らしめ年始の賀礼を述ゝ也獻上物其品多〻と聞ゆ同ぶく十七日信長公ハ秀元を御前近く召出され祝礼を請て後宜ふ様順慶多年予に誠實を竭し殊に旧冬松永父子征伐の剋其軍忠謀畧莫大なり四郎定次若年ゝと雖ども勇武を含む主將の氣あり室ありや否やと問せ給ふ秀元謹んで答へ稟ゝる〻定次若齡にして未だ野妾候たゞ順慶も年來心底に轉此義と願居候ふと答ふ信長快然として亦曰いく子も日來之と思ハゞ非ざ幸ひに子ゞ季の女子十二歳となる仐名を秀子と呼せられけり當春中に四郎定次ゞ室とるゝて筒井ゞ家に婚媾せゝむべきと汝秀元媒妁まべゝと命ぜられ御玉觴を下ゝ賜ハりければ秀元忝けなさの余り感涙ゝて御請稟ゝ上翌十八日城を立て急ぎ十九日筒井に歸城ゝ斯と委細を語りゝべ筒井の上下大きに悦び勇み謗くゝと所理なりき偖亦織田右大將信長公ハ數年石山本願寺を攻給ふ縡出軍數回に達ぶゝ雖ども兎角に

要害堅固の城地あれば中々容易攻拔き難く流石の信長も殆ど特
飽倦千計万憂勞する計り依之倩々思慮〜給ふ樣い當時山陰山
陽四國九州及び關東にい北條氏政兄弟越後にい上杉謙信甲州武
田勝頼予鋒鋒と挫んと時と窺ふ然るに世外の僧法師と相敵ど
り軍馬と費や〜將卒と失ふ縡良將の為行ひふ非ぞ今方便を以て
石山へ和議とへ門徒們が勢と散脫せ〜め勇鋭鎔け〜時機と看積
り不意に攻寄討卷らば是實に宿禽を刺よう安らんと心中例あ
表裏工夫と設けれ荒木摂津守村重矢部善七郎の兩人と上使と
命ぜ〜れ口上の赴き委〜く仰せ含め給ひ石山の城中に遣ゆ〜れ
る兩士へ下知に〜ゐび摂津に到り本願寺へ安土より上使參

上の由と達〜兵杖と留めて疑念と散〜相見え給ふべき旨
稟〜入る顕如上人聽て諸將僧俗と聚め談縡評議〜給ふ處
に軍師鈴木重幸大きに笑ひ信長當城と長袖へと侮どり猥
に軍馬と進めせ崩さんと心カと竭〜謀ると雖も味方の門
徒等一心の忠義と思ひ粉骨〜て防ぎ〜ゆる間信長施まぎき
術計盡今偽りと構え上人と欺むらんと做ぞ〜〜先迎へ入て
介演舌と聞せ〜まん究めて是和睦と計らんとの使者なち
ん何ぞも有即刻の返答と御遠慮ゐりて衆議の上爰答〜給へ
〜と稟〜けれへ顕如上人介詞に同ど給ひ頓て信長の使者兩
個と城中客殿へと迎へ入給ふ荒木矢部兩個礼服正〜く着用

〜従者僅に十個計にて徐々と城中に入来る為体一向に敵中も恐る氣色なく恭禮謙譲正しく行ひ使者の座席に直りぬ

扁者曰く自是村重使命を演石山開城を禀し入れども上人皇太子靈告と蒙むり弘法因地の旨意を云さて開城違背禀さるゆえ使者立帰りて介旨と云信長倍怒り大軍を催し一時に石山を攻潰さんとて既に介准備逮づる処羽柴秀吉之を諫め止め鈴木重幸に書を送て重幸多年の肺肝を説辨〜出張せしめて淀川の水没〜畢ぬ而て後石山開城と成南紀鷺の森御難戦信長父子不意落命測ず一宗門の勝軍と成厥ち豊太閤の御代に到り東西両派の真宗立高祖鸞師の弘通の恢德愈未世に栄傳る話次の三篇に局を結ぶべし

繪本石山軍記第二編巻之十畢

東西両本願寺来由

# 繪本石山軍記

初編 十冊出版
二編 十冊出版
三編 十冊嗣刻

土屋正義編述　松川半山画

此書ハ本願寺隆鸞より第八代蓮如上人自ら記せる子の系統を叢聚し抜粋生ずの莊内石山古蹟と茅創しぬふより第十一代顕如上人の世に到り織田信長此地の要害と思ひ本願寺と迎け攻撃を以て築うんと欲ぬ上人と十余年の戦争ゆ既に本願寺の衆徒とあり衆寺の一揆配織田の大軍本願寺の討を以て数討ち攻撃等ゆ悩し既に孫顕如の時戦国豊人危難九死の名号の表徴根本小密蔡血戦討死翔紫雲の英智全章を徹底言葉死を決して小清水の名義淀川に入死決勅命を伝て厚如上人石山開城し紀州雑賀へ逃生信長の意を之を改る時ゆ逆臣明智光秀本願寺ゆ於て信長を戦を敢ず

森の書を照さ[illegible]於未孫に吹ぐ隨跡[illegible]を考吉中國の考[illegible]
大家と[illegible]元利と和陸し[illegible]山陰の工義の光秀と元[illegible]
上人學る森と出て[illegible]物見[illegible]
陸奥を造[illegible]て住ふ[illegible]
東西ふ名て書出を建築するの時ふ[illegible]の山中より[illegible]
[illegible]山の復士[illegible]の門注[illegible]
[illegible]他力本[illegible]の意佛未[illegible]
迷ふ絶人の[illegible]石山合戦ふ揚る[illegible]を


出版人

大阪府下南久寶寺町四丁目

前川善兵衛


# 軍書小説類藏板目録


大坂心齋橋通南久寶寺町

伊丹屋善兵衛


源平盛衰記　片假名　廿五冊

後太平記　片假名　廿五冊

殘太平記　同　十二冊

四國軍記　同　十二冊
一名土佐軍記

駿臺雜話　平かな　五冊
室鳩巣翁の著也而して仁義の大道を[illegible]て鬼神の説和漢古今名將勇士の[illegible]を辨し治[illegible]の要略兵法和哥詩文の[illegible]説老儒の見[illegible]

續武將感狀記　同　十冊

聖德太子傳圖會　平かな　六冊

補正行戰功圖會　平かな　十一冊

畫本西遊全傳　四十冊

太田道灌雄飛錄　六冊
左衛門大夫太田持資入道三位[illegible]政御の後[illegible]の[illegible]上杉氏の[illegible]文武の英才を[illegible]取ざる一世の戰功忠義を委くあらはす

繪本玉藻譚　五冊

同白狐傳　十冊
一名[illegible]物語

復讐言山石見英雄録　全部　五十冊

此書三編まで作者各替り四編以下廿九冊一家の多筆にて記もつぞ山石見氏そもそも通編
結綴い主人公ともるハ勿論しも絵本臺の五傑と称もる勇士の偽を飛して由良獄の賊徒鎮治天
獨立の復讐を示頗る作者の新案を費せり七編の結局にて餘計の一案あり八冊をもて一部とす

刀筆青砥碑　八冊

此書水滸語の稗史子の原稿を曲亭翁の筆削せし物にて鎌倉の賢人名君の劇新係
て愛妻を殺し物も好夫偽三郎を購うて
盗賊と誣ゆへて殺さんとせしを青砥藤綱が
明断各その罪を照て懲す仮詰妙案とす

蛍雪室の八書　八冊

下野国の豪族主人聖の家長平四郎国範
忠心遠孫の新平左衛門が妖術妖怪を
が忠孝を賞面白くものせり

同金毘羅神霊記　十冊
同誠忠傳　十冊
同孝感傳　十冊
同顕勇録　十冊
同奇縁傳　十冊
同忠孝美善録　十冊
同伊賀越孝勇傳　七冊
同合邦辻　十冊
同浅艸霊験記　十冊

世係のいとも伝る忠義の安奈と萬葉がゆもとバ
おのゝく他て一部紙をう

繪本金花談　十二冊
同雪鏡談　十二冊
同二嶋英雄記　十冊
同彦山霊験記　十冊
同亀山話　十冊

鎌倉年代圖會　五冊

教経鎌倉の創業より宗尊親王の下向
まで故て将軍家五代の間の時事を委
くあるそ

鎌倉大樹家譜　五冊

宗尊親王鎌倉に着府より累世執権横
恶の義雄北條が一門亡びて後醍醐帝天下を
平定しまでを編

武蔵坊辨慶異傳　十冊

浮世中が水滸伝の面目を撰て変化せる
趣向あれば甚興ある小説なり

大内多々四維軍記　六冊

大内義隆の弱者風流より豎臣相良武任が
侍多浪人服部を賺ゆ陶晴賢を妻を君を進

三冊
復讐言檀之二葉　六冊

妖婦生駒の方がよく陶尾張守の賢臣が
大悪逆をなど正史に出入せる面白き稗史あり

## 近江縣物語　五冊

花山院の所代なりし坂上梅丸が全傳にして
盗賊義系保輔壽丸が残暴と橋安世がす
女園生が貞操安世が勇常くが邪慾膳病のも
梅丸そうに教光銘長が詔して賊徒征伐
の六将軍義系保昌を助けて賊を平らげ
近江掃部進み生の実母を逢ひ復活してその
父の姓名を聞いて知るべし

## 昔語松虫墳　六冊

延武の頃遠江の国の勇士野田太郎清忠氏安
武勇妹桂子が恋人徳田機が奸謀安井隼太少隈
悪者田勝美義里が世田の家に水清清八が妻
松女が枉死水清太郎が非嘆の雄女梅木が孝心
松虫墳紅塚などの由来を語る

## 人形廿二枚繪草紙　六冊

天文の頃ころ清磨國三木の城主別所長宗の臣
藤崎左衛門尉なる夫婦の女子
遠原勇義が流松三郎左衛門が奸悪まで高
村の熊優が義気をよく絶る詞を與へり

矢口續話

## 新田神靈忠孝貞婦傳　六冊

大庭伊織信澄八股田殿右衛門が姦計より
自害し妻の里人と奴隷雀田蜀助が貞烈
忠勇ふて寃を雪ぎ家帝あり

## 復讐言千丈松　七冊

近江の国松井逸蔵源人篠村大義を欺き
れて家両人を奪ひ寃家を窺ひ青柳位市
友と共もに阿波の篠村まで志を遂げ本懐

## 忠孝人龍傳　五冊

補家外傳

## 弥生佐久間　六冊

補家の長男恩地左近が女兒弥生なる佐久間八
郎が仇を討ん為に男子に成りて武勇の誉
の高き人なり

報恩珍話

## 十かえる花　六冊

建久年中に出羽の山縣の郷士常盤井内記泰
兼則が二男龍二郎吳人の仙郷に誘れて教を受
け後年諸者を助けて父の仇を山伏山を討ち
仙女去来見と昇天せる奇談奇事

北野霊験

## 二葉の梅　六冊

弘前の城池上七九郎が悪の子
蜀女と上田美之二郎が復讐の小説にて悪
年岩見之亟義侠の老人を教訓がつ
を綴りたり

骨董新話

## 花標因縁車　五冊

小説半分の小金と夢幻を
逆の頑徳の常念法師が
怪くまるも

## 玉掻頭　五冊

三光の掛のを主とする話説にて上野の郷
高井土の呉服屋十兵衛の義と田盗
し上方に出て西方の浄光寺に三角銀西の金
を携帰る路掛村の強盗鬼三郎と銀

孤前の士人東條國書幼年より文助を
夫が仇山中壮二郎を年久しく伺ひ獲り復
和州郡山より復讐せし事実を録し
て紀常の倍寿等紙上に見あり

南部忠孝記　五冊
敵討　小栗忠孝

奥州南部の士竹内新吾内藩の新恩の士
小栗忠孝と狙み窺ふ人をして討殺させ
小栗が僕長助終に他処をさろ得て
阿波に赴き主の妻子に告知せて小栗
万二郎に恐く父の仇を報ぜし事実あり

長崎聞見録　五冊

理齋隨筆　六冊
和漢の細事何れも記載されたれども世に埋
益無し一説に聞くと雖も記録せざる

金屋金五郎全傳　五冊
浪花堀江の市人金五郎が風儀のよく義侠
多き南蛮額の小三が情実の膝を枕べ抱き
半時濃厚陽門が癖性の可笑き流れ事時意
陰と異して潮人多くの一話あり

輪廻物語　五冊
安倍仲麻呂吉備大臣が流唐し安名を
蓬莱宮と改め陸明を満ぐ多と悲く俗説の
作る話を紀す事実は屠蘇陽両人乃
縁を明答して蓬莱唐にて空の結構
和漢の史外に寄稿と云へり

風流茶人氣質　五冊



明治十六年三月九日版權免許
同　年　六月　出版

編輯人　静岡縣士族　土屋正義　大阪府下北區紅梅町八番地寄留

出版人　大阪府平民　前川善兵衛　同府下東區南久寶寺町四丁目八番地